

## 現代人文地理学へのブラーシュのメッセージ

斎 藤 毅

### 1. 人文科学と現代

第二次大戦後の日本では、概して人文科学は社会科学に一步をゆずる傾きがあった。そのため、本来、人文科学としての性格のつよい諸科学でさえ、競って社会科学化を目指してきた。

地理教育とも関連の深い教育学もそうした科学の一つである。進歩的な教育学の研究者達は、ひたすらその社会科学化をはかり、人文科学としての基本的性格をなかば放棄してしまったが、その結果、教育学は山積する現実の教育問題の解決に有効な処方等をほとんど示し得ないまでに衰弱してしまった。社会システムの解明を目指す社会科学の方法だけでは、人間の生き方に直接かわりをもつ教育現象の研究では十分な成果を期待できない。

こうした人文科学の社会科学化とその影響は、人文地理学にも色濃く反映している。人文地理学はその体系の中で、経済地理学を中核にすることが久しく通念化してきたが、その結果、人文地理学は人文科学としての性格を著しく希薄にし、研究の硬直化を招いてきたのである。

### 2. ブラーシュの読み直し

飯塚浩二氏の名訳のおかげで、ブラーシュの『人文地理学原理』は、現代の地理学徒が最も容易に手にし得る「古典」の一つとなっている。

周知の様に、これはブラーシュの遺稿を弟子のドゥ・マルトンヌが整理し、刊行したもので、いわゆる「未完の書」としての性格をもっている。ブラーシュの地理思想については、わが国にも幾つかの論考があるが、「未完」の部分を含めて、その全体系を再吟味する試みはこれまでに必ずしも十分になされてきたとはいえない。

さて、この書物は、「人類」、「生活様式」、「交通」の3篇から成るが、ここには壮大な文明史的枠組があり、特に「交通」が一つの独立した篇をなしていることに改めて注目すべきであろう。

すなわち、そこには伝統的な生活様式——これ

はむしろ「民俗」或いは「生活文化」とすべきであろうが——を維持してきた世界の諸地域が、交通の発達によって巨大な都市群を生み出し、それらを中心に、人類は新しい文明体系を形成していくとするプロットが浮んでくるのである。従って、「断章」に「節」の地位を与えられたに過ぎない「都市」は、本来「篇」を構成すべきものであったかと思われる。

その結果、まず第1篇で「人類」を位置付け、第2篇の「生活様式」でその文化の地域的な違いを述べ、第3篇の「交通」でその変化を説き、幻の第4篇で人類の新たな生活の場としての「都市」或いは「高度工業化社会」の登場が予想されるのである。

ブラーシュが、現代から考えて、この最も重視すべき都市文明論の展開を前に世を去ったのは誠に残念なことであった。もし、こうした体系が完成していたら、人文地理学は人文諸科学の中心的存在として発展し続け、社会科学への宗旨替えなど思いも及ばなかった筈だからである。

### 3. 人文地理教育と文明論

本来、地理学は単に実用の学のみならず、科学における一つの方法論であり、哲学としての性格を強くもつものである。

わけても、人文地理学は知識人にとって不可欠な教養であり、西欧人文主義の伝統を現代に伝えるものといえよう。現代世界の諸地域に関する地誌論的な具体的識見をふまえ、現代文明に対する深い洞察力をもたらすものこそ、人文科学としての人文地理学の役割りであり、ブラーシュがかってフランスの高等師範学校などで実践的に追究した人文地理学の教育的側面であったに違いない。

文化人類学などの発展によって、近年やや変化の兆しもみられるが、わが国の学校教育でも学界の動向を反映してか、教養としての人文科学は、従来とかく軽視されがちであった。しかし、地理学に関する限り、大学の一般教育こそは、こうし

たブラッシュの無言のメッセージを現代の若い感性の持ち主たちに伝え得るまたとない場ではない

かと考えている。

(東京学芸大)

## ドングリとツクバネ

鈴木 邦 雄

日本の森林が「ドングリ」型であるなら東南アジアの熱帯多雨林は「ツクバネ」型であると言える。なぜなら、北日本の自然林はブナ、ミズナラ、カンナなど夏緑樹が、また南日本の自然林はシイ、カンなど常緑樹が中心であり、いずれも秋にはドングリをたわわに実らせるブナ科の広葉樹なのである。一方、東南アジアの多雨林を代表するのは、フタバガキ科 Dipterocarpaceae の広葉樹である。フタバガキ科の高木は、赤一白の可憐な花を咲かせた後、お正月のねつきの羽根(ツクバネ)そっくりの種子をつける。成熟し、高さ50mから落ち始めたツクバネ種子は、プロペラのように回転して、遠くまで運ばれていく。また、一年中気温が25℃以上の東南アジアでも乾季が長い地域では、同じフタバガキ科でも乾季に落葉する森林、すなわち熱帯雨緑林が成立している。東南アジアの熱帯多雨林は既に「幻の森」と言われるまで破壊されつくされており、現存する森林の大部分が雨緑林で占められている。

6年前から毎年、インドネシア、タイなど東南アジアの森林植生の調査を続けている。そこでは、教科書(?)とは違った森林が成立しているのに驚かされることが多い。たとえば、一般的に東南アジアの自然林は、海拔1000m付近までフタバガキ科の熱帯多雨林と熱帯雨緑林で、1000mを越えると日本と同じ、東アジア特有の照葉樹林に変わるとされている。ところが、タイの内陸部に広がる熱帯雨緑林(多くの学者が自然林といっている)に案内してもらうと、いずれの場所でも林内に炭化した古木が目立ち、明らかに火が入った二次林である。日本で25m以下の林を見慣れている者にとって、40-50mの超高木の森に圧倒されるが、この雨緑林の構成種は極めて貧弱である。現在は確かに雨緑林であるが、その多くの地域で

は人間活動の影響が及ぶ以前の原始林が常緑のフタバガキ科による多雨林であったとの説も少なくない。人間活動の歴史は、森を破壊しただけでなく、二次的に気候を変え、自然の潜在力を変えてしまっているといえる。しかも、この雨緑林内で「ツクバネ」を探すと、照葉樹林を意味する「ドングリ」が見つかるのである。事実、30m以上のフタバガキの超高木の間には、高さ10-20mの *Quercus*, *Castanopsis* など日本と同じシイやカン(常緑のナラ)の仲間が生育している。

海拔300m足らずの雨緑林にも「ドングリ」は落ちていますが、やはり雨緑林の正式な構成員とは考えられない。熱帯の森林内の「ドングリ」を生態学で説明するには、多少時間がかかった。年間を通じて25℃以上の気温と降水に恵まれている熱帯の森林生態系は、度重なる伐採と野火によって土地の潜在力を低下させ、より環境条件の悪い生態系の構成員の適地と変わる。そこで、初めて温度条件に恵まれない熱帯山地の照葉樹林の構成員＝「ドングリ」の木が侵入出来るのである。人間活動は、豊かな自然を破壊し、植物の生育地を次々に消滅させてきた一方で、特定の植物の分布を広げることもやっている。この解釈でいけば、「ドングリ」の木は熱帯林に対する人間側からのインパクトの指標となる。

日本では植物地理、植生地理への関心が少ないが、爆発的ともいえる環境変化が進展している現在、多くの研究者が現れてもよく、従来の研究では説明できない知見が隠されている筈である。ただし、成果をあげるためには、多くの時間と幾らかの資金(?)を必要とする地道なフィールド科学である故に、こちらからあまり勧めるわけにはいかないのが悩みである。

(横浜国立大学)